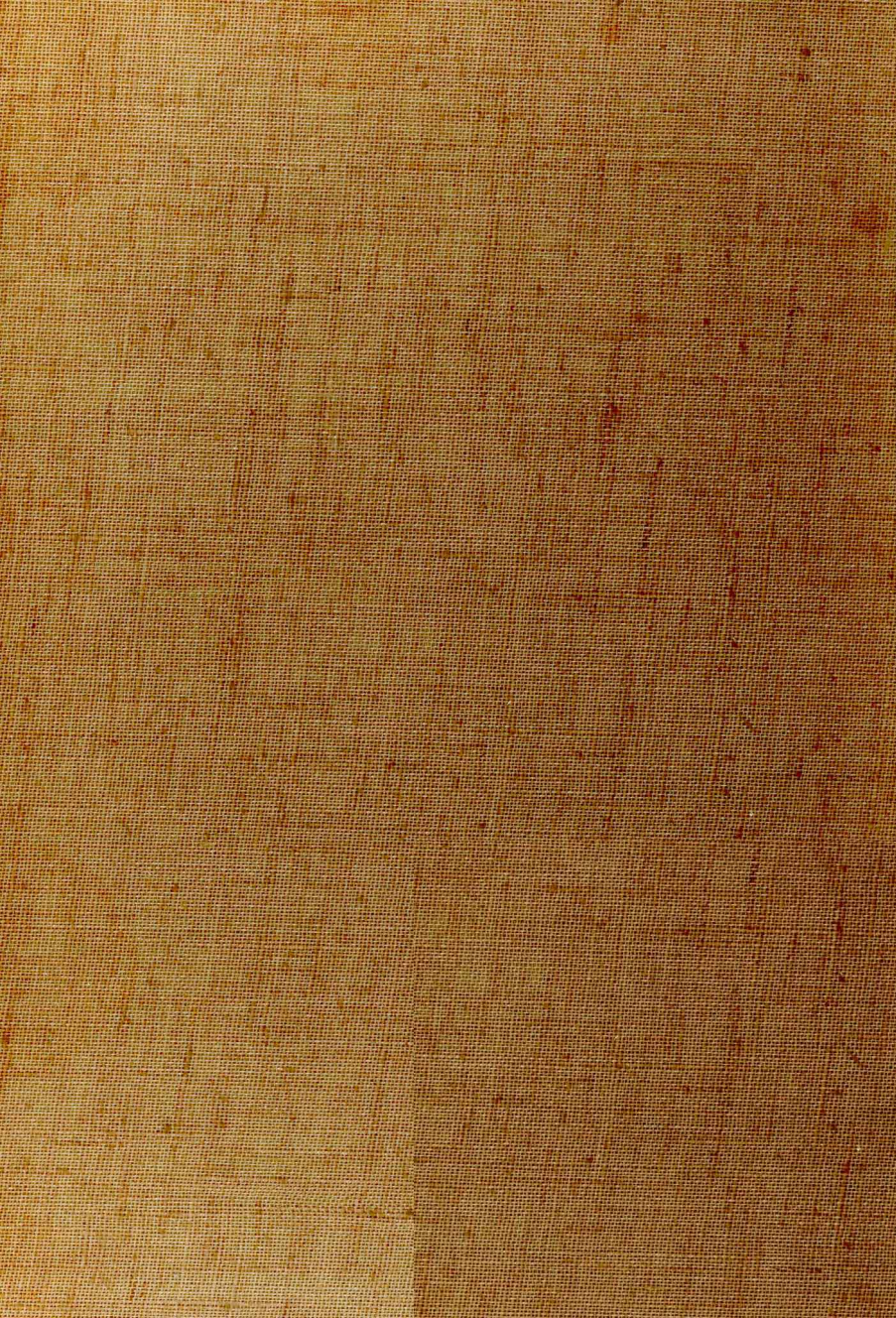




木下尚江著作集

第十五卷

明治文献

木下尚江著作集第15卷（第十五回配本）

昭和四十八年十二月二十日第一刷発行©

定価三〇〇円

著者 木下尚江
発行者 藤原正人

発行者 株式会社 明治文庫

東京都豊島区池袋2丁目1070

電話・東京 40521

振替・東京 36290番

印刷 文庫印

製本 昭精興社
堂

1391—040015—8309

例 言

一、本巻には、『書簡に代へて』『病中吟』及び「島田三郎伝」を収録した。

一、本巻の「書簡に代へて」は、妻の死に際して知人に贈られた自刊の和装本（縦一八・八、横一二・八^{センチ}）の写真版による覆刻である。ただし表紙は省略して、口絵写真で示した。

一、本巻の「病中吟」は、口述筆記をもとに歿後編集・発行されて知人に贈られた和装本（縦一九、横一二・九^{センチ}）の写真版による覆刻である。ただし表紙（石川三四郎の揮毫）は省略して、口絵写真で示した。

一、雑誌『日本評論』に遺稿として連載された「島田三郎伝」は、誤字・脱字が相当量に達するので、許される範囲で訂正した。校訂の基準については巻末の『「島田三郎伝」の校訂について』で説明したが、一般的なものについては、次に掲げる。

(イ) 初出の表記を原則として生かしたが、初出の表記が尚江固有の用字・用語・仮名遣いと異なるために、訂正した箇所もある。

(ロ) 漢字は正字体に統一せず、原則として初出を重視した。ただし字画の殆んど変らないものは、正字体を用いた。

(ハ)「と」は「こと」とし、踊字の使用は校訂者の判断によった。

(ニ)活字の大小については、初出を無視した。

(ホ)難訓の文字には振仮名を追加した。それに伴って、初出にあった振仮名は（ ）に包んで、両者を区別できるようにした。

(ヘ)本文中及び行間の「」で包んだ文字は、すべて校訂者による補填または註記である。

一、本巻の口絵最初の二葉は、『病中吟』と同じく、歿後知人に配られたものの複写である。

一、「解説」及び『島田三郎伝』の校訂について」は、引用文も含めて、新字体に統一した。

病中吟

目次

御挨拶……………木下正造…一

木下尙江と予……………百瀬興政…三

木下尙江兄……………相馬愛藏…六

病中吟……………木下尙江…九

病床の木下翁……………逸見斧吉…九

木下翁との因縁……………逸見斧吉…七

御 挨拶

木 下 正 造

多彩なりし父の生涯も、昭和十二年十一月五日午後四時四十分、御厚情を賜はりました皆様の温い友情と子供達の感謝に護られつゝ、思ひ出深き西ヶ原の家で誠に静かに終幕を閉ぢました。

一と月餘りに渉る病中、皆様からうけた御厚情の限りは父の常に深謝致せしところで、又私として一生忘れ得ぬ感激で御座ります。こゝに心からなる御禮を申し上げます。

最悪の場合を豫知せし父が、「一切の形式を廢せよ」と私共に遺せし意旨に従ひしたため、世間的に缺禮も多々ありました事をお詫

び致します。又自然皆様の御好志は拜納いたしましても、世の常の儀禮を用ひませぬ事を御承知下さい。

唯茲に、父が病間筆録せしめ、「病中吟」と名づけて逸見氏御夫妻に托し置きしものが御座ります。それに父の晩年の寫眞として昨年十二月九日撮影朝日新聞社から贈られ、大層氣に入りましたものゝ複寫を添へ、記念としてお願ひ申上げますから御受納下さい。

過去廿五年の私への慈愛と洞察を込めた「一箇の良民たれ」の遺命は、私に唯一の進路と勇氣を與へて居ります。

今後一層皆様のお力添へをお願ひ申上げます。

——昭和十二年十一月二十四日——

木下尙江と予

從兄 百 瀬 興 政

從兄弟數人ありし中に種々の關係にて少年時代より恰も兄弟の如き觀ありしものは予と尙江との兩人にて有りき。予の年齒は氏に兄たりし事一年なり。予の松本中學校に入るや氏亦一年後れて同校に入り、予の笈を負ひて東京に遊學するや氏も亦一二年後れて早稻田專門學校に學べり。而して予の郷里に於て醫業を開くや氏復た歸りて辯護士試験準備に努め、傍ら信濃日報に筆を執るに至り、次で辯護士を開業するや、日夕往來して政治を談じ社會を論じ加之家事をも相語るを常とせり。氏の筆陣は銳利にして氏の言論は暢達せり。予は思想の上に寧ろ氏の感

化を受けたるもの多かりき。其頃普通選舉を唱導したりし人々を中心としたる有志者間に一種の疑獄事件起り、氏も一時松本監獄に囚はれの身となりたる事あり。氏の老母は留守宅を守り、其懊惱見るに忍びず、予は一日も速かに晴天白日の來らん事を祈りたるに、一夕「今晚木下出獄す」との報を耳にしたれば予は自ら出迎ひに行きたるに、果して九時頃氏は悄然として出て來りたれば、寸時も早く之が喜びを見せばやとて直に相伴ふて老母に接したるに、其翌日予は裁判所へ召されて、誰人より木下の出獄を聞きたるやと尋ねられたれば、予は累を他に及ぼさんを恐れ遁辭を設け奇智以て之を辯じて事無きを得たり。其れより氏は間もなく上京して毎日新聞に筆を執り傍ら社會運動に奔走したるなり。當時の平民新聞は之が消息を物語るものなりしが、予も之が愛讀者たりし關係より後に聞きたる次第なるが警察の黒表に乗りたる一人なりし由。當時を追憶すれば予は何となく國家社會主義を奉ぜんとしたる傾向ありしやに考ふ。其後の氏の行動は予より

寧ろ在京の諸君は多くを知られつるならんを信じ一切を省略するが、氏は由來直情徑行の人間ながら老母在世中は極めて孝心深く、従つて自己の心情を出来る丈抑制したるやに見受けらる。斯くして社會運動の第一線より退きたる氏は自己獨自の信仰に陶醉して悠々たりしものゝ如く、予が俗物として實際的に社會の改善策を話す度毎に、氏は只莞爾として二三の評語を加ふるのみ。一昨年秋上高地の紅葉を樂みに歸松したるを最後とし、口に唱へながら故郷を訪ふ機會なかりしは、蓋し氏が多少の心残りならんを推するのみ。更に氏の風采に接する能はざる今日となりては、一種の寂寥を感ずる自然の情切なるを覺ゆ。

今回遺友諸君が氏の爲に一小冊子をものせらるゝに當り、敢て一言を添へて之が厚志を感謝す。思ふに之れ有りて自ら氏の面目の躍如たるものあるを信ずればなり。

（昭和十二年十一月十八日、松本にて）

木下尙江兄

相馬愛藏

余は五十四年前中學校に入學し、上級生中に傑出せる兄を見出せし以來、今日まで緩みなき友情を持ち續けし事は、余に取りて光榮でありまた幸福であつた。

兄は我信州人に共通せる缺點であり亦長所でもある傲岸不屈の精神を多分に持つて居つた。彼のクロンウエルを理想的の人物として崇拜せし如きも自己に肖た處があつたからだ。早稻田に學びながら大隈侯の門を叩かず、剛腹なる星亨を筆誅し終に非命に倒れしめしも、此の性格の顯れと見る可きである。

斯る性格が世の權力家の恐れ惡む處となつて、其の鬼才も用ひらるゝことなく終に不遇の一生を送りし者の如し。然し世俗的に不遇なりし事は兄のためにも世の爲にも却つて大なる福音であつた。

兄の火を吐くが如き雄大なる熱辯も、十幾種もの血に彩られし如き名著も皆此の不遇の賜である。鑛毒に泣く窮民に對して、田中正造翁を助けての活動、奴隸の一種なる娼妓の解放を叫びて、矯風會頭潮田女史と共に東奔西走せし美俠も、等しく不遇の齎らせし半面と謂ふ可きである。

最後の二十八年間、哲人岡田虎二郎師に學び、人間の眞生活は學問にあらず、權力にあらず、富にあらず、名譽にあらず、且に道を聞いて夕に死するも可なりと、古聖人の道破せし眞諦を味ひ、莞爾として逝きし人間木下の完成を見たる我々は唯感激あるのみだ。何ぞ兄の死を悼まん。

病中吟

木下尙江

十月一日

○

無智無學呆然として天地の
大能の御手にまかせ奉る

十月二日

○（夜）

病人が 屁をこいたぞや 晴の秋

一度は天下を狙ひし悪黨も老ひて病床に絶食しては何の慾も得もなし

蕎麥が喰べたや 信濃のそばが 大根の辛味で つるつると

子供の時を思ふて

井戸をくみあげ 藥罐をさげて 母につれられ 小麥かり

蠶の 時

びくを小腋に 虻蚊にくわれ ばばのあとから 桑を摘む

善光寺詣りを

木曾の雪どけ 善光寺道者 蘆にすげ笠 竹の杖

御嶽行者

鈴を鳴らして 御嶽行者 白の鉢巻 金剛杖

馬子の歌

煙管片手に 追分節を 染分合羽の 馬子の聲

幼友達の六歳でみまかりし春井の静さを思ふて

裏の井戸端 ふくらみ草を ふいた静さの 白い顔